

AI ガバナンスを現場経験から捉え直す - GPAI 学生ギャザリング参加を通じた考察 -

東京大学 公共政策大学院 公共管理コース
氏名 立川 仁美

本レポートでは、所属大学におけるプロジェクト、また 2026 年 1 月 13 日に実施された GPAI 学生ギャザリングへの参加を通じて得られた気づきを整理する。GPAI (Global Partnership on AI) は、AI の責任ある開発と利用を推進する国際的枠組みであり、倫理、労働、ガバナンス、プライバシーといった多面的な政策課題を扱っている。学生ギャザリングは、これらの国際議論を学生視点から再解釈し共有する場であり、本参加を通じて AI を巡る課題が技術論を超え社会構造の再設計に関わるテーマであることを改めて認識した。

2025 年に東京大学の江間研究室のプロジェクトにて、「製造業の未来と働き方」をテーマとするプロジェクトに参加した。工場見学とディスカッションを通じて、AI やロボティクス導入が労働経験や価値観に与える影響を検討した。現場では、人と人の関係性を基盤に据えながら技術を活用し技能向上やモチベーション維持を図る姿勢が観察され、技術導入は効率性のみでは評価できないことを実感した。また、モノづくり産業とライフスタイルの変化との関係を読み解く議論を通じて、働き方の未来は制度や技術のみならず個人の価値観変容とも密接に関係することを理解した。一方で、社会人大学院生としての立場から、学生主体の議論には複雑な感情も抱いた。未来の働き方を語る際に、現場経験から距離のある視点が前提となっていると感じる瞬間があり、そこに「強者の論理」を見出したことも事実である。しかし同時に、その違和感は自身の視点の位置づけを問い直す契機となった。AI ガバナンスの国際議論も同様に、抽象化された理念が現場の経験と乖離する可能性を常に内包している。学生議論への距離感は、政策と実践の間に横たわる構造的隔たりを自覚的に捉える契機となり、自身の視点の位置づけを再認識させるものとなった。

この認識を踏まえて当日の議論を捉えると、生成 AI の利用実態に関する議論は理念と現実のギャップを具体的に示す事例として理解できた。GPAI 学生ギャザリングでは、生成 AI が文章生成支援や思考整理に活用される一方で、裏取り作業の増加や誤情報リスクといった課題が共有された。ここから得られた示唆は、AI の信頼性が単なる技術精度の問題ではなく、利用者の判断能力や責任配分に依存する社会的プロセスとして成立しているという点である。AI ガバナンスは制度整備のみで完結するものではなく、人間側のリテラシー、運用能力、実践知との相互作用の中で初めて機能することを実感した。

他大学の発表では、技術の高度化に伴い人間の役割をどのように位置づけ直すかという課題が提示された。生産性や安全性といった成果は測定しやすい一方で、働く人の創造性や成長実感、幸福感は評価指標に反映されにくいという指摘は印象的であった。この議論を通じて、AI 導入の成果が数値で把握可能な側面に偏るほど、人間が感じる価値や経験が意思決定の中で見えにくくなる可能性を強く意識するようになった。効率性の向上と人間中心の視点を両立させるためには、何を成果として評価するのかを改めて問い直す必要があると理解した。また、公共空間におけるデータ取得を巡るプライバシーの議論では、顔画像の即時破棄や設置告知の明確化といった具体的対応が共有された。この議論から感じたのは、技術が社会に受け入れられるかどうかは規則を整備するだけでは決まらず、人々が納得し安心できる運用が示されることが重要であるという点である。AI ガバナンスとは単なる規制の問題ではなく、利用者や社会との信頼関係を築く過程でもあると認識した。

本ギャザリングへの参加を通じ、AI を巡る議論における自身の立ち位置を改めて問い直すこととなった。国際的な政策議論は不可避免的に抽象化される一方、現場経験は具体的かつ文脈依存的であ

り、その両者の間には容易には解消されない緊張関係が存在する。今回の経験を通じて強く認識したのは、AI ガバナンスの課題は制度の整備そのものよりも、抽象化された理念がどこまで現場の経験知を取り込み得るのかという構造的問題にあるという点である。この意味において、自身の役割は両者の中間に立つことにありと考えている。理念を現場へ翻訳すること、そして現場の知見を理念へ還元すること、その往復を担う主体がなければ AI ガバナンスは空洞化する可能性を持つ。AI の普及が不可逆的に進む現在、制度設計や理論議論に関与するだけでなく、自らの実践領域において経験を蓄積し続けることが不可欠であると考え。



画像 : AI 生成 (nano banana 使用)